『日韓文化財論集Ⅳ』の刊行

奈良文化財研究所では、韓国国立文化財研究所と1999年に共同研究協約書を締結して以来、共通した研究課題のもとで研究員を相互に派遣し、調査・研究を進めています。

今回、2016年度から実施してきた第４次共同研究「日韓古代文化の形成と発展過程に関する共同研究」の成果をまとめた『日韓文化財論集Ⅳ』を刊行しました。この共同研究では、研究パートナーをつくり、お互いの調査に随行し、まさに寝食をともにしながら調査過程も共有することで、研究課題の着眼点や調査手法を相互に理解し、議論を深めながら、成果を蓄積してきました。

その結果、日韓古代の石工技術、日韓の古墳築造技術、金属器・土器・瓦の製作技法の比較、土器の付着物分析、木簡、都城制と寺院、伝統造景空間の比較等、総勢23名の研究員による12本の研究成果を収録した論文集となりました。

なお、本書は韓国でも同名で刊行されており、2008年度から数えて日韓各４冊、総８冊のシリーズとなりました。こうした積み重ねが相互理解を深め、研究のみならず、継続的な人的交流に着実につながっていると考えています。

この４月からは、新テーマのもとで新たな共同研究が始まりました。新型コロナウイルス感染症により、国内外の現地調査が大幅に制限された現在、どのように共同研究を進め、その成果を蓄積していけるのか、模索しながらのスタートとなりますが、５年後には、さらに多彩で、充実した研究成果を盛り込んだ『日韓文化財論集Ⅴ』の刊行をお知らせできればと思います。　（都城発掘調査部　松永 悦枝）

日韓両国で刊行された『日韓／韓日文化財論集』

「埋蔵文化財ニュース 184号」もう一つの特色

環境考古学研究室では、これまで遺跡の発掘調査報告書に掲載されている花粉分析データの集成を進めてきました。2021年３月末に刊行された「埋蔵文化財ニュース184号」は、花粉分析からみた都城造営と植生変化をテーマに、奈良県・滋賀県・京都府・大阪府の４府県域を特集したもので、各府県域を研究対象としている研究者にご寄稿いただきました。

中身としては専門的な内容ですが、埋蔵文化財担当者と環境考古学に興味のある学生へ向けてのメッセージとともに、長岡綾子氏（長岡デザイン）による美しいレイアウト・デザインによって、手に取りやすく親しみやすい冊子となっているのが、本号のもう一つの特色です。

表紙は、マツ属花粉の顕微鏡写真です。15コマの写真はそれぞれピントが異なっています。研究者はピントを少しずつ変えながら一つの花粉の形態を観察します。次頁にはプレパラートの写真があります。土から抽出した花粉は、このようにスライドガラスとカバーガラスの間に封入して観察します。じつは表紙から２・３頁までは花粉分析の一連の処理方法を遡るようなイメージになっています。また、４・５頁は同定の際に比較するためのさく葉標本と現生花粉標本で、奥付の頁は、分析で使う道具の一部を並べています。

試料の処理方法や道具類は研究者によって多少異なり、ここでは厳密に示していませんが、ふだん表に出ない部分についても、興味関心を持って読んでいただければ幸いです。

（埋蔵文化財センター　上中 央子）

埋蔵文化財ニュース184号（2・3頁と奥付頁）